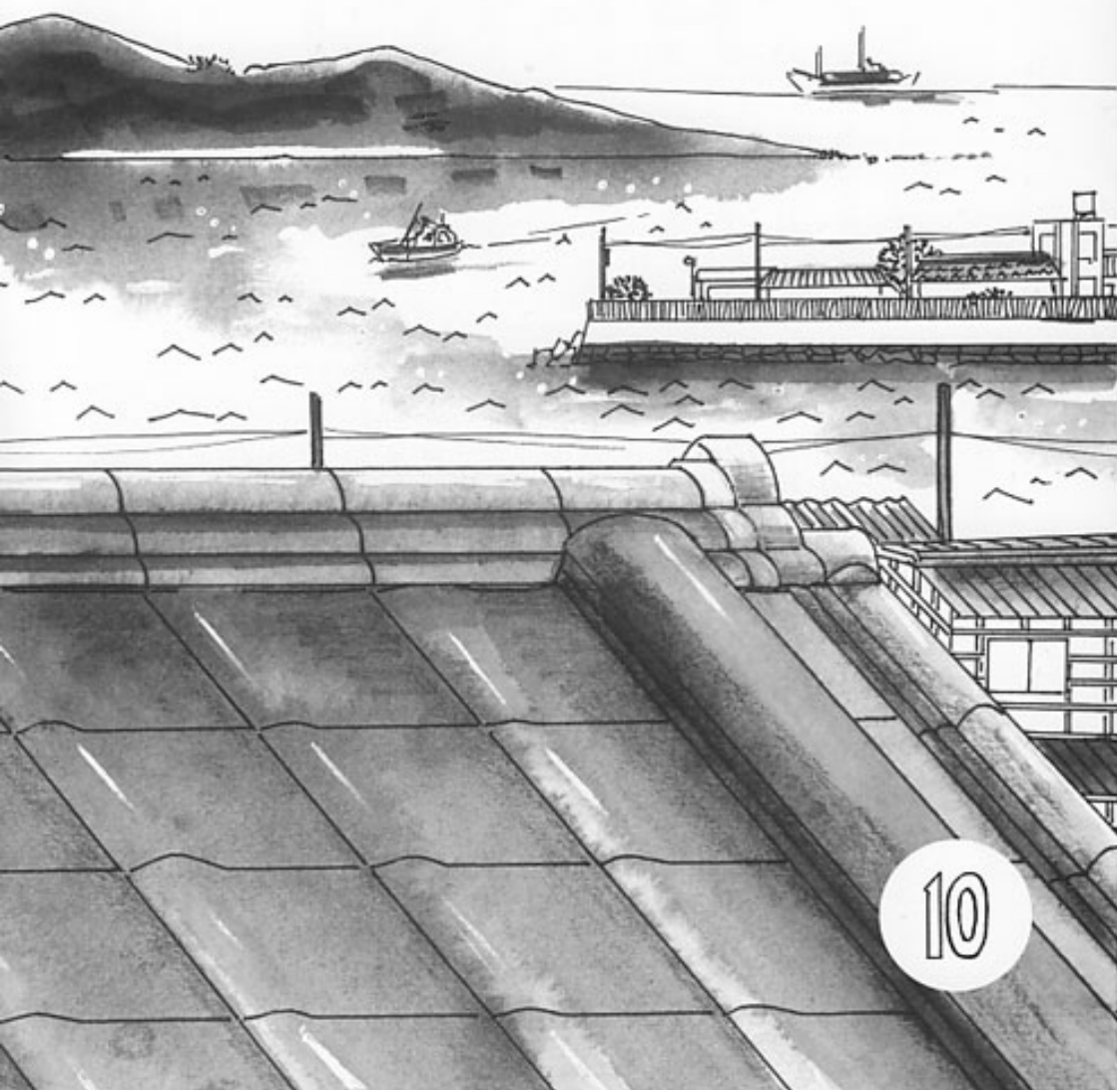


令和2年10月5日発行(毎月5日1回発行)
第60巻10月号(通巻735号)

風土



10

食ひ物の名は限りなしつゆの雨

(句集『含羞』より昭和二十一年作)

今回からまた過去の俳句に遡って桂郎師の俳句人生を辿ります。昭和二十一年というから戦争の傷跡まったたな
かです。桂郎一家は戦火に追われ、転々として、昭和二十一年に河上徹太郎夫人の世話で、鶴川村の能ヶ谷(今の
町田市の一角)にやっと一軒家を借りることができました。長女路子を消化不良で失い、長男徹郎六歳の頃です。
疎開者にとって村の者はきびしく、ひもじさの続く毎日だったにちがひありません。村の田畑の村人の収穫を目の
当たりにしながら、それが口に入らない。雨漏りのする小屋に籠りながら、思い浮かべるのは戦争前のあれこれの
食べ物です。美食家の桂郎師に「限りなし」のことばが切ない。

月涼し軽業のごと畦わたり

(句集『含羞』より昭和二十三年作)

鶴川村にすっかり馴染んだ頃の一駒です。この畦を通ればどこに行けるかもわかる。桂郎師の瘦身が颯爽と宙を
跳ぶのです。

百一年子規の留守なり蟬の穴

(句集『波の花』より平成十四年作)

子規庵を訪れた時の句です。子規が亡くなったのは明治三十五年ですから、この句を作った時には百一年も経っ
ている訳です。「留守」という言葉を使い、さも子規が生きているような想いにさせますが、それほど未だに俳句
の世界に影響を持っているということですから。子規庵に佇むと子規の暮らしが手に取るようにわかります。もう一つ
は器師の子規に対する並々ならぬ思慕が「留守」と置いたのでしょうか。「蟬の穴」は、黄泉の子規に通じているよ
うにも思われます。

寄せ鍋や風呂吹きに酔ふ四十人

(句集『波の花』より平成十四年作)

子規に「風呂吹の一きれづつや四十人」と言う句があります。子規は病床をおして毎年、子規庵で「蕪村」俳句
大会」を催していました。松根東洋城、河東碧梧桐、高浜虚子などそうそうたる俳人たちが集まったのです。句会
が終わり、妹律が炊いた一切れづつの「風呂吹き」を肴に歓談する絵が残っています。

禾の風 南うみを

時計草明るき雨の朝はじまる

東山鉾に回せし比奈夫逝く

桂郎や徽の座布団うら返し

七月二十六日

梅雨ひぐらし師の下駄の齒のかくも減り

草の香の夕べとなりし端居かな

まろびたし夕顔棚に莫塵を敷き

滴りを御簾とし洞の観世音

安寿四句

安寿への径の湿りやめうがの子

菱の花まばらにとほき安寿塚

おはぐろの安寿の空を抜けられず

たましひの汐汲み浜の夜光虫

夜の秋の鋭き禾の風の音



竹間集

同人作品



流星

田中佐知子

三伏の掌に載せ豆腐切る
艶失せずゐてかなぶんの骸なる
日盛りや我が足音の蹤き来たる
逝く夏の浜にあまたの蟹の穴
掃苔の蛇口捻れば水熱し
墓参二つ果たし故郷をあとにする
星飛んで大海原に届かざり

道をしへ

中村 洋子

能因のたどりし道の道をしへ
遠雷の湿生花園そよぎ出す
夏帽子リボンで見分け双子かな
一と回りして噴水に腰下ろす
雨意きざす丹沢の風立葵
梅雨明くる「吉野葛湯」を吹いてをり
東山へ立ち上がりゆく雲の峰

茅花流し

橋添やよひ

茅花流し募る一口城主かな
黴育つ四百年の隅櫓
新緑に染まりて佇てり天守跡
群れて生ふ城の死角の梅雨茸
薫風や花熨斗形の釘隠し
遠ざかりゆく煩惱や滝の前
天道虫だまし子どもを騙しをり

土用入

浅田 光代

涼風や赤子眠りつつ笑ひ
友逝きてのうぜん宙をよぢのぼる
滝壺の手前の水の明るくて
くれなゐの蟹がバケツに土用入
打水や御僧のあと猫通る
無口なる夫のあふげる団扇かな
瑠璃の色重しと曳いて蜥蜴の子

庭花火

高村 令子

七夕や一人を降ろす無人駅
梅雨上り日ざし分け合ふ峽の邑
想ひ百ありて一人の庭花火
青芝へ嬰置く花束置くやうに
朝採りとメモを背負ひて独活置かる
裸子（葉内）を追ひて命を羽交締
軸足の決まらぬ齡更衣

夏だより

柿沼 盟子

燃えあがる四万六千日の線香
万緑の中一本の竹枯るる
黒南風に凭れてバスを待つてをり
近況は七行ほどの夏だより
白南風や鼻緒の太き日和下駄
聞き慣れぬ鳥語に外すサンダラス
多言語のお国自慢や茄子料理

乾く蚯蚓

土井 三乙

老鶯や杜近ければしきりなる
父の日の父として飲む酒少々
ベビーカー追ひかけてくる夕立かな
老人の茅の輪をくぐるに独り言つ
日盛の無音床屋の椅子に吾
翅たたみ天道虫と識られけり
渡り切れぬ道でありしか乾く蚯蚓

風 鈴

林 いづみ

瀨に添ふ八丁堤立葵
妙法のともしび朴の咲きにけり
岩肌を白衣と化すや千条ちすじ滝
日盛りの影踏むこともなき家路
水は地中電波は空を奔る朱夏
ひるがへる羅ロビー横切りぬ
風鈴や追悼文をしたためて

合歓の花

小林 共代

朝顔の白より開く神の庭
土塁なほ残りし杜の大祓
緑さす百観音の御砂踏む
翁にも見せたきほどの合歓の花
鳴立庵主を無くし梅雨に入る
茅花流し母のこゑ聴く無言館
短夜やコロナ自粛の末読本

黒揚羽

中根 美保

放流の水かがやかに梅雨の明
夏落葉一まいが地に起き直る
朝涼や金星に添ふ星二つ
縫れ合ひ梵字のごとし黒揚羽
鍼灸の鍼が針の字秋暑し
白粉花の群あらくさに連なれり
はや疵を持ちて幼き椿の実

広島忌

間島あきら

忘れ難き日数の数多八月来
広島忌鐘に車中の黙禱す
炎暑きて庵の納戸に眼を馴らす
酔芙蓉路辺にスピードガンを組む
ひとつにはあらむか父の落とし文
笹竹を担ぎ来るも盆用意
寝釈迦山腹より入道雲放つ

山河集

同人作品



南うみを選

学生寮の干し物振れ梅雨深む
師の腰にポケット瓶や背越鮎
鬼百合の重たき雨に首もたぐ
遮音壁登り詰めたり凌霄花
夕焼雲つれて飛来の米軍機

森田 節子

河童忌や遺るジョニ黒ふくみつ
立葵もう少年の眼もて
花あふち目印として父母の家
梅雨茸くるぶし撫づる風過ぎて
寧日の青芝に足投げ出して

小原美美子

雨後の翹たひらに広げ鳳蝶
ライオンの咆哮四方へ梅雨明ける
笹百合の挿されて戻る父の魚籠

岡本 尚子

虞美人草漢の夢の如何許り
京を捨て京に恋して冷奴

奥田 茶々

新牛蒡の笹がき水に反り返る
そつぽ向く花瓶の百合をなだめをり
送り梅雨鴨居の脂の垂れてをり
共白髪までと言ひしが冷奴
飯茶碗離さぬ子なり敗戦日

国分 千恵

山壁の風に乗りたる黒揚羽
白鷺の白を落として青田波
大夕立バイオリンの不協和音
遠茜水の溶ける音のして
籐寝椅子雲の流れにまどろみぬ

忘るることも

土井ゆう子

三月の空は気まぐれ誕生日
風花の舞ひはじめたり雛納
ふるさとに雪解雫の寺庇
囀や注ぎ分けゐるハーブティ
煮て揚げて山菜うれし五月来る
新緑や散歩途中のストレッチ
オムレツの山にパセリの植樹かな
マーマレード煮詰めて倦みし夕薄暑

籠りゐる日や麦秋の旅を恋ふ
シーサーを待みと飾り五月憂し
ぼうたんや忘るることも幸せと
叱るやう励ますやうに時鳥
朴咲くやまだまだ生きらるる予感
父の日や今もあなたの娘です
木戸押せば十薬の白こぞりけり
山脈の向かうは津軽梅雨あがる
若者の髭のさまざま街は夏
鬱屈の日々出番なきサングラス
水打つて黄昏ながき離れかな
早寝して夏野漕ぎゆく夢をみし

風土独語／南 うみを



夏山やびしりびしりと星礫

根岸 善行

この句の「夏山」は明らかにアルプスの鋭峰であることが解ります。それが「びしりびしり」というオノマトペです。切り立つた岩山に輝く星はまさに「礫」で、句が引き締まりました。

師の腰にポケット瓶や背越鮎

森田 節子

「背越」とは「膾」のことで、これは釣った鮎を骨ごと膾にしたものです。これを楽しむのに師匠は腰からウイスキーのポケット瓶を取り出しました。風流人と言わざるを得ません。

百合活けて真つ正面の定まらず

津川かほる

百合はその香りと清楚さで独特の存在感があります。さてその百合を活けてみたのですが、どう向きを変えても納得できません。百合の真つ正面とは正面なのか横なのか悩んでしまいました。

河童忌や遭るジョニ黒ふくみつ

小原美美子

忌日俳句は故人の精神的な繋がりをもとに、どこかに故人を彷彿させるものがなければなりません。作者は「龍之介」に「ジョ

ニ黒」を取り合わせました。都会派の龍之介とどこか合います。かつて亡き友と語りあった「ジョニ黒」です。

新牛蒡の笹がき水に反り返る

奥田 茶々

「新牛蒡」は早蒔きした若いものを抜いて、葉と葉柄と根を共に食べます。むろんあく抜きのため根を笹がきに水にさらします。柔らかいので笹がきの反ること。この気づきがこの句の眼目です。

天道虫だましくわしやつと葉に潰す

岡本 尚子

「天道虫だまし」は天道虫に似ているが、茄子などに害を与える虫です。これにやられると茄子の皮は固くなり食べられません。見つけた作者はさっそく潰しました。「くわしやつ」とにリアルさと作者の感情が表れています。

遠茜水の溶ける音のして

国分 千恵

本来は「夏水」で季語ですが、「水の溶ける」で夏としました。「遠茜」は遠くの夕映えの空です。作者は想いにふけりながら、水割りを傾けています。ガラスの水がぐらりと音をさせました。映画のワンシーンのような世界です。

水無月の備後表の匂ひかな

赤石 梨花

この句には、俳句における季語とモノの力を感じます。「水無月」は陽暦の七月。農民にとって一番水を必要とする時期です。青々とした豊の「備後表」の匂いは、雨を呼ぶ匂いでもあるのです。

風土集



南うみを選

田を植えて眠りこけたる村ひとつ 宇治 渡辺 やや

水鏡崩して清水呑みにけり

不意打ちに倒れてみせて水鉄砲

草刈りや雨の匂ひに追はれつつ

お絞りにレモンの香り梅雨の明

枇杷たわわ明るき午後の雨しきり

南島七 原 博美

十葉の匂ひ摘みたる雨上がり

朝焼けの音無きドラマ独り占め

蜘蛛の囿に今日また触れて乱れ髪

一筋の風通り抜け汗拭ふ

背から食ひ腹から食らふ串の鮎

いわき 新妻 洋子

参道へ導く灯白紫陽花

濃紫陽花触れて一夜の雨の落つ

薬師堂の山より滴る御薬水

自転車漕ぐ子に強き走り梅雨

蛭や源氏の闇と平家の闇 上尾 根岸 善行

くちなしのこの世の染みに触れはじむ

富士の風筑波の風や梅雨晴るる

太陽の芯は暗闇揚羽蝶

いんげんのグリーンカーテン窓から獲る

一面の紫陽花を過ぎ日本海 秋田 石井美智子

幼児の団扇の遊び切りもなし

畝まはる麦藁帽子だけ見えて

向日葵に太郎次郎と名付けをり

サイダー飲む爪に畑の土少し

夏草や缶蹴りちやんばら知らない子 千葉 上村 葉子

父の日やちちの背丈は知らぬまま

サングラス赤きマニキュアつけやうか

ぐらつきし乳歯こはごは食む氷菓

雨を行き水無月を食む夏点前